

Y 大学医学部附属病院における 外来化学療法室の看護師の活動紹介

三平まゆみ
MIHIRA Mayumi

はじめに

近年、がんの罹患率が増加する中、医療保険改革制度に伴う在院日数短縮や、がん化学療法において次々と新しい抗がん剤の治療方法が開発され、外来通院で可能な化学療法が数多く確立されてきた。又、病院等の相談窓口や訪問看護の充実等により、外来通院で抗がん剤の治療を受ける患者が増加傾向にある。そんな中、平成14年4月より新しく診療報酬として外来化学療法加算が新設され、多くの病院で外来化学療法を専用に実施する部屋が用意されるようになってきている。Y大学医学部附属病院(以下Y大学病院とする)においても、平成14年11月に通院治療センター(以下センターとする)の名称で外来化学療法を行う専用室を開設した。ここではY大学病院におけるセンターの開設までの様子とセンターにおける看護師の活動内容を報告する。

通院治療センター開設準備

Y大学病院は、平成14年11月にセンターが開設されるまで、外来における化学療法は各診療科の外来で施行されており、抗がん剤の調製も診療科によっては看護師が外来診療介助の合間に行っていた。センター開設前に外来看護師を対象に行った調査では、「ベッド間の距離が近く、スクリーンで覆えないことがあり患者のプライバシーが保ちにくい」「窓が無い部屋があり、壁一面で覆われて暗いイメージがある」「処置室が一つしかなく、風邪の患者も同じ部屋で点滴を行っている」、また化学療法の多い科では「診察の合間に主治医が点滴をするので診察が滞るか、治療が遅れるか、どちらかになる」「注射のオーダーがされても他の処置や入院説明などが重なり化学療法の患者を待たせることもある」「治療後でも他の処置に追われ十分な観察が出来ない」「化学療法の患者は長時間かかり、ベッドの回転が悪くなる」などの結果が出た。そのため、平成14年7月より、該当医局医師、薬剤師、看護師、事務技官、施設課職員と外来化学療法委員

会を開催し、外来患者に対する抗悪性腫瘍剤治療を一括管理するとともに、医師、薬剤師、看護師及びその他の職員が協力し、外来化学療法患者の効率的かつ効果的な治療を行なう事を目的として運営要項を決定していった。Y大学病院がセンターを開設する頃は、まだ他の病院でも開設の準備や検討段階の病院が多く、先行施設の情報が少ない中で準備を行った。

1. 通院治療センターの専任職員

外来化学療法加算の規程では、化学療法の経験を有する専任の常勤看護師が治療室に勤務していること、当該化学療法につき専任の常勤薬剤師が勤務していること、とあり、Y大学病院では、看護師1名、薬剤師1名の専任職員を置いている。

2. 通院治療センター運営要綱

外来化学療法委員会において、運営要綱を次のように決定し、役割を明確にした。

1) センタースケジュール連絡票の提出

責任医師はスケジュール連絡票を治療初回時とプロトコール変更時に薬剤部に提出する。

2) センターの予約と注射オーダー

責任医師は利用予約と注射オーダーを事前に入力する。

3) 化学療法患者の優先診察

センターでの治療実施の円滑を図るため、診療前採血がある場合、迅速オーダーの入力と、化学療法患者の診察を優先する。

4) 診察による施用の可否・オーダーの変更

責任医師は施用予定日の外来診察により、当日の化学療法の実施・中止及び変更を決定し、センターにその旨を連絡する。

5) 注射薬のミキシング

薬剤師は、センター内の調製室において、責任医師の連絡を受けた後に注射薬を混合調製する。

6) 注射薬の投与

責任医師または当番医師は、注射薬及び患者の状態を確認の上、化学療法を実施する。

7) 患者の看護

専任看護師は、責任医師または当番医師と協力して患

者の看護にあたる。

8) 実施の確定

専任看護師は患者の退室前に実施の確定を行う。

9) 患者急変時などの対応

患者の急変等に対しては、責任医師または当番医師が対応するが、必要時救急部医師の応援を求める。

10) 責任医師は、センターで化学療法を実施する患者に対し、診療料金が加算される旨を事前に説明する。

3. 通院治療センターの環境

センター内の環境は、患者がより安全に快適に治療を受けられるように配慮した。ベッド8台、リクライニング式の椅子を3台準備、加算を取ることからベッドは電動式リクライニング式ベッドを導入し、各ベッドには液晶テレビと、家族も傍にいられるように椅子を用意した。ベッド間の距離は約1.5メートル取り、必要に応じて隣のベッドとの間を仕切れるようロールカーテンを設置しプライバシーへの配慮とした。また点滴を受けながらも飲食が行えるよう冷蔵庫と電気ポットを設置し、観葉植物や絵、写真などを飾り、音楽を流すなど、患者がくつろげるようにしている。(写真1)



写真1

. 通院治療センターの利用状況

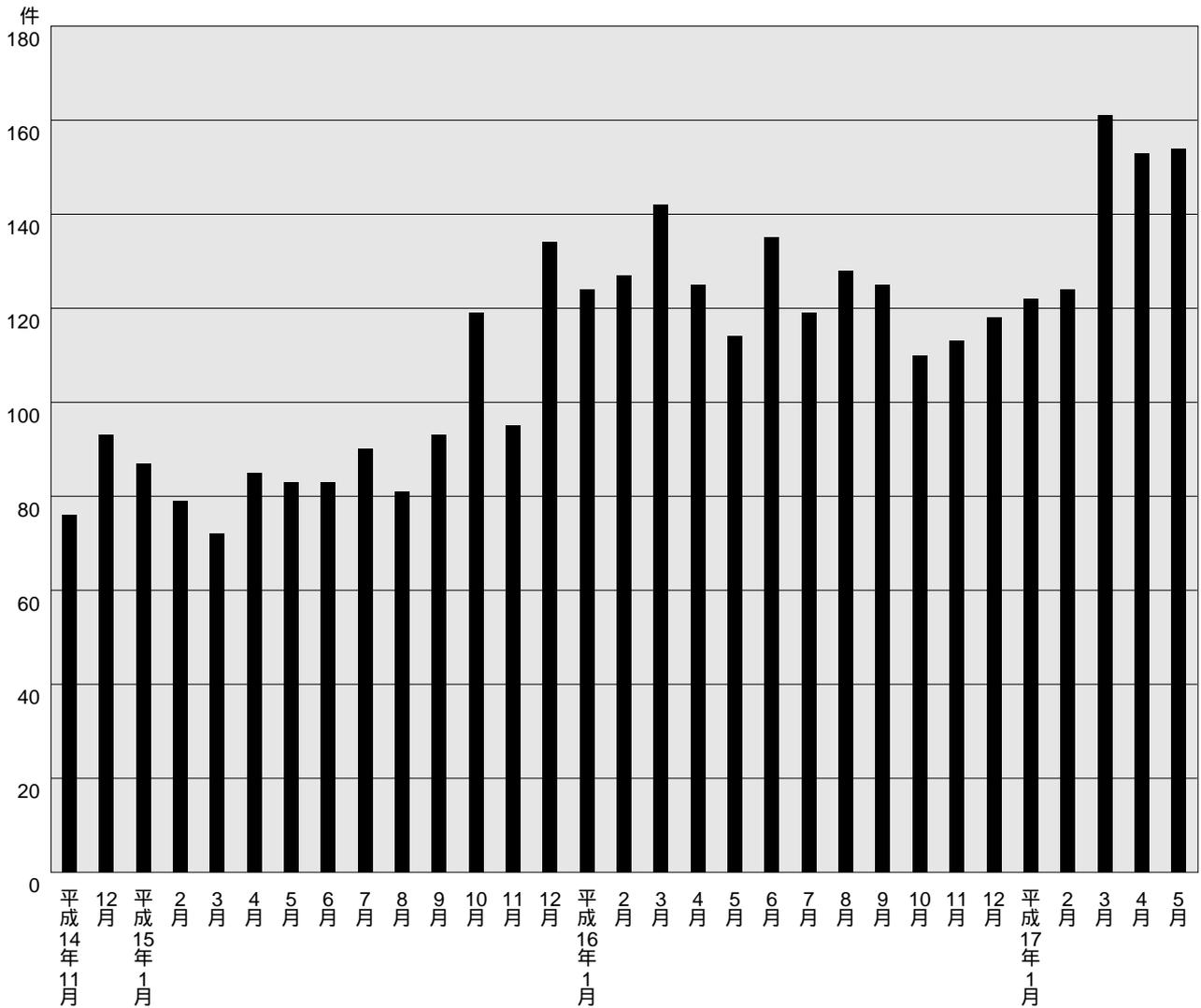
平成14年11月の開設当初は、加算対象である末梢の静脈点滴を施行する患者が対象だったが、リザーバー植え込み患者の増加に伴い、平成15年9月よりリザーバー植え込み患者もセンターを利用している。そのため利用件数(延べ件数)は静脈点滴患者のときよりも多くなり、その後も利用件数は増加傾向である(図1)。開設時から現在まで、利用患者数の月平均は約112件、平成17年に入ってから1日平均約7.13件である。そのため、患者数が多い日はベッドが不足し、ベッドが空くまで待っていただいたり、椅子による点滴を行っている状況が増えつつある。疾患別利用割合は、平成17年4月のデータを図2に出しているが、他に脳腫瘍、前立腺腫瘍等が1~3%占める月もあるが、他施設と同様に消化器疾患が約半

数以上を占めている。患者は外来で診察を行った後、センターに移動し点滴治療を受けているが、センターに入室してから治療が開始されるまで、長い時で75分、短くて5分、平均30分を要している。待ち時間の理由は、各医師から同じような時間に指示書が発行され薬剤師の調整が追いつかない、患者の入室が重なり看護師によるバイタルサインのチェックや調製された薬剤のルートの準備が重なる、点滴の準備が出来ても穿刺する医師が違う患者の診察や処置によりすぐに実施できない、等であった。

. 通院治療センターにおける看護師の活動内容

看護師は初回利用時にスケジュール連絡票、看護要約、カルテを基に治療スケジュール、病名告知の有無、患者背景、病歴を把握する。継続患者として病棟より申し送られる患者については、退院前に病棟訪問を行って患者と面識を持ち、退院時に残された看護問題の解決に向け継続して看護できるように病棟から申し送りを受けている。はじめてセンターを利用する患者には、パンフレットでセンターの案内書を用い、センターの利用方法とこれから通院治療を支えていく旨を説明している。

抗がん剤については、薬剤の知識と指示書の十分な確認、薬剤の安全な取り扱い、投与中の観察が必要とされる。指示書については、診療科毎にレジメンがあるが、実際の指示箋では具体的に溶解する薬剤名や量までレジメンが統一された指示でなく、同じ患者でも医師により溶解するボトルが違い50mlや100mlであったり、30分が1時間など指示が違うため患者のスケジュール連絡票を基に十分な確認が必要とされる。薬剤の安全な取り扱いとしては、薬剤師が専任で専用室にて、安全キャビネット内で曝露予防保護具(マスク、手袋、ガウン、ゴーグル、長靴)を着用し調製を行っている(写真2)。看護師も点滴ルートの準備を行うときは手袋、マスクを装着して準備している。治療開始にあたっては、点滴ルートの準備、穿刺を行う当番医師と薬剤の確認を行ってから点滴穿刺の介助、患者のバイタルサインを含めた当日の全身状態の確認、を行っている。点滴開始後は、時間指示の点滴落下速度の確認と使用薬から想定される副作用の有無を確認し、血管外露出、血管刺激の有無を定期的に観察している。又、カルテに記載された医師の診察記録や検査データ、患者からは日常生活の様子や治療後の副作用の把握を行い、身体症状、精神症状に応じ生活指導を行いカルテに記録している。しかし、患者数が多いときは時間がとれず、入室時のバイタルチェック時やラウンド時のわずかな時間で情報を聞いている状況である。そんな中でも、体調不良などで治療が出来ないときでもセンターまで出向いて今日は中止になったことを告げに来る患者や、入院中に顔を見せに来てくれる患者、亡くなっ



(注)平成15年9月よりポート装着患者利用開始

図1 利用患者の月別件数

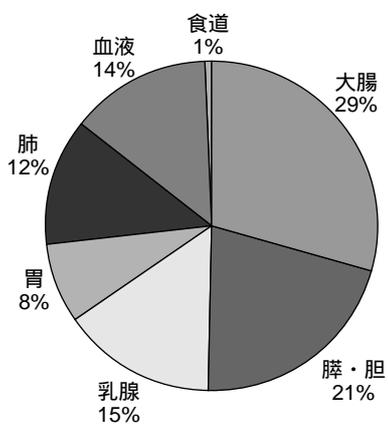


図2 疾患別延べ利用件数 平成17年4月



写真2

た患者の遺族がお礼を言いに来てくる等、患者との信頼関係が築けている事をうかがわせることがある。

治療を受ける患者は経済的な負担、がん性疼痛、予後に対する不安など抗がん剤の一般的な副作用以外の問題も抱えている。そのためセンターでは患者の状況に応じ、医療支援センターや緩和ケアチームとの連携も行っている。

. 今後の課題

今後外来通院による抗がん剤治療の患者がますます増えていくことは予測される。Y大学病院においてもセンターの利用需要が増えることに対し、利用患者数に対する診療と治療予約時間を含めたベッド運用方法の検討を行い、患者入室から点滴開始されるまでの待ち時間短縮を検討する必要がある。また、チェックシート等を用いた患者も参加した副作用チェック方法の検討も必要である。副作用については予防的なケアを行うとともに、積極的な副作用のケアを行い患者のQOL維持・向上を図るため、指導時間の確保と内容の充実が今後の課題といえる。